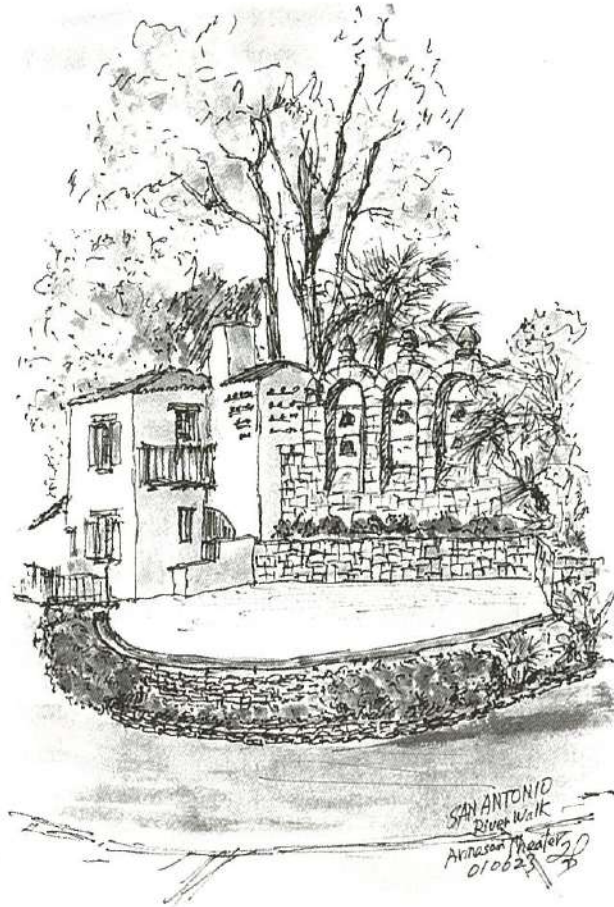


アルパック ニュースレター

VOL.109

発行/2001年
9月1日

ISSN 0918-1954



ハグマンを称える鐘のある野外劇場（本文中に関連記事があります）

目次 contents

-
- ・多面的な取り組みで地域所得の向上をめざす
田園空間づくり 2
 - ・住民と事業者を結ぶパートナーシップ型まちづくりの
実践事例の報告 4
 - ・ビジョンを実現する街のパワー 6
 - ・NPOフォーラム 2001 東海会議から 9
 - ・浪花の町を見に行きませう 10
 - ・メディア・ウォッチ 11
 - ・まちかど 12

多面的な取り組みで地域所得の向上をめざす田園空間づくり —京都府瑞穂町における試み—

〔京都事務所／山口 繁雄〕

はじめに

「農業栄えて農村減びる」と懸念されてきた農村地域において、今、それに抗して各地で多面的な取り組みが展開されています。「複合的な農業経営」でも支えきれなくなった農村を「農業+他産業」型の「多角的な地域経営」で発展させていこうという農村が全国的に増えてきています。

農村における農業以外の産業は、一頃前までは「工業」でした。でも今ではそれは大変難しいことになっています。それらの多くが海外に立地するようになったからです。

そこで、次に求められたのが「都市との交流」で、「グリーンツーリズム」という言葉が創出されました。つまり、田園的・自然的環境を求める都市住民が増えてきたので、農村地域にそれらの人々を迎え入れ、交流関係を強めて、新たな所得確保の機会を創出しようとしたのです。

ところで、平成11年に「農業基本法」が改定されて「食料・農業・農村基本法」が制定されましたが、「農村」が法律で位置づけられたのはこれが初めてでした。また、農村の多面的な機能に着目して総合的な発展を、と謳ったのも初めてのことでした。とりわけ都市との交流活動による総合的な農村づくりが、目標像の一つとして標榜され、「田園空間博物館構想」という考え方も示されました。

このような動向の中で、京都府瑞穂町の産業課長から、瑞穂町の新たな展望を開きたいので協力してくれないかと声を掛けて頂いたのです。前置きが長くなりましたが、このレポートは、そこでの取り組みの中間的な報告です。

瑞穂の挑戦、第1幕

さて、その取り組みの紹介に入る前に、瑞穂の挑戦の第1幕として位置づけられる、これまでの取り組みを見ておかなければなりません。

瑞穂町は、京都市や大阪市からおよそ50km位のところにあります。高原状の地形であるために大規模で平坦な農地に恵まれていませんでした。このため「米作」だけでは生計の維持ができず、「米+^そ野菜」等の複合的な農業経営を営んできました。また、「丹波まつたけ」や「丹波栗」がそれらに加えられてきました。「丹波大納言」で知られる小豆も、地域特産品として開発されたものです。さらに、最近では「黒豆」も加わりました。それでも農村の生計の維持・発展は難しく、若者は居つかず流出し続けたのです。

そんな中で、農家の主婦達が「農産加工品」の開発に乗り出しました。家計を助ける程度の幾ばくかの収入と生き甲斐を求めてのことでした。こうした農村女性グループの一つに「もえぎグループ」というのがあり、ある時ヒット商品の開発に成功しました。それは「^{そう}草納言」という商標のつけられた「^{なごん}ぎんつば」でした。地元の特産品である小豆とホウレンソウを活用して、地域独特の特産品を開発し、見事に「全国商工会連合会長賞」を獲得したのです。

これらの開発商品は、販売できて報われるものであることから、農家の人々を販売をも視野に入れた生産者へと変貌させました。「もえぎグループ」に続けと、ある集落では「木炭・竹炭」づくりを始めました。新たな胎動の始まりです。瑞穂町役場でも、そうした動きに対応して「道の駅」をつくり、地域の農産物や特産品の販売に力を入れるとともに、「ハム工房」

を建設して新たな特産品開発にも乗り出しました。その工房では、今、Uターン青年がハムをつくっています。

このような流れをもっと発展させて、豊かで魅力的な瑞穂町をつくりたい。情熱家の産業課長の気持ち、私どものヤル気を引き出しました。

瑞穂の挑戦、第2幕

仕事を始めるにあたって、まずお願いしたことは、地元で頑張っている農業者、農産加工品グループの代表者、販売活動を行っている道の駅の責任者、地域活性化に取り組むリーダー等、今後の瑞穂を実質的に支えるであろう人々を集めて下さい、ということでした。形式的な委員会は、意味を持たないと判断したからです。課長は、すぐに反応してくれました。驚く町長を説得し、町の最強メンバーを集めてくれたのです。

私どもは、今回の仕事の基本的なスタンスを「地域所得を上げよう」にしようと呼びかけました。農業基盤の脆弱な瑞穂町は「少品種多量生産型」というより「多品種少量生産型」でいくべきで、これらを多角的に経営しながら、地域全体としての所得を向上させていこうというわけです。

「本音で議論」を合言葉に、早速具体的な検



京風ぎんつば草納言 出典：パンフレット

討が始められることとなりました。

検討テーマの設定は、案外スムーズにいきました。一つ目のテーマは、地域農産物をベースにした農産加工品の開発と生産・販売ネットワークをどうつくり上げていくか、ということにしました。二つ目のテーマは、顧客の開発・拡大が必要なことから、都市との交流システムをどうつくり発展させていくか、ということにしました。三つ目は、都市住民に瑞穂の熱烈なサポーターになってもらいたい、そのためには環境も魅力的でなければならない、ということで、「美しいむらづくり」をどう進めるかということにしました。そして四つ目は、一番大事なものですが、上記の三つの取り組みを中心になって進める組織づくりとソフト整備としたのです。

多角的な経営地域づくりをめざして

上記の四つのテーマをめぐる、熱心な議論が展開されました。その結果、中間的なとりまとめを行い、次のような二つの提案をすることになりました。

一つは、「田園空間博物館」ともいえるような、中核的なコア機能と周辺機能からなる空間構成と機能整備イメージの提案です。

あと一つは、農産特産品の開発と販売活動、都市との交流活動等を企画・推進する経営組織体制の提案でした。

今年度は、これらの基本的な方向づけを受けて、個別課題の具体的な検討に入る予定です。新しい地域経営モデルの具体化に向けて瑞穂町の方々と共に頑張りたいと考えています。

住民と事業者を結ぶパートナーシップ型まちづくりの実践事例の報告

〔京都事務所／石本 幸良〕

京都の都心部、姉小路界隈で取り組んできた「地域共生の土地利用検討会」のまとめが完成しましたので報告します。

(1) 地域共生の土地利用検討会の取り組み経過検討会発足の経緯

今回対象となる検討地は、平成7年に分譲マンションの建設計画に伴うマンション建設反対運動を展開した用地にあたります。地元ではこれを機に「姉小路界隈を考える会」を設立し、その後、さまざまな活動が活発に展開されることとなります。このマンション計画は平成8年3月に白紙撤回されました。

検討地の地権者である(株)アーバネックスは、平成10年、地域の人に受け入れられ、ともに享受しあえる施設建設を目指したいと、地元との意見交換の仲介を(財)京都市景観・まちづくりセンターに要請しました。地元では、関係町内会や団体でその意義や進め方などについて協議を重ね、提案を受け入れることで合意にいたり、平成11年1月に「地域共生の土地利用検討会」が発足しました。

検討会の目的

検討会は、対象地をまちのシステムの一部として捉え、まちの人が考える「まちの将来像」を探りながら、住民と地権者・開発事業者

とがともに、対象敷地での土地利用を考えることを目的としました。さらにもう一つの目的として、まちの人のさまざまな思いの集積であるこの都心界隈を、まちの人にとって「自らの生活の重要な舞台」として、事業者にとって「この地域ならではの事業活動を展開する重要な舞台」として再認識し、その価値を共有しながら土地利用を考えることで、地域のまちづくりを盛り立てていきたいと考えました。

検討会の流れ

検討会では、従来のように施設の姿・形を優先して考えるのではなく、まちづくりの流れのなかから、その機能を編み出し、機能に合わせて空間化していきたいと考えました。

そのため計画全体を大きく二つの段階にわけ、第一段階として検討地の土地利用の機能イメージをまとめ、第二段階として、まとめた土地利用の機能イメージに沿って具体的な建築計画や施設の内容について協議することとしました。また、この検討会のもう一つの特徴として、新しく入ってくる人についても、将来にわたり共にまちを盛り立てていけるよう第二段階の流れの柱にまちの人との交流や意識の共有を図ることを組み入れました。

まとめの発行

今回の計画は住民と事業者を結ぶパートナーシップ型のまちづくりとして、全国的に先例のない取り組みでした。検討会の取り組みを順を追って丹念になぞることで、他の地域での「地域と共生する土地利用」を模索するための、一つの指針となることを願って報告書をまとめました。

(2) 今回の取り組みの成果

取り組みの当初段階ではお互いの真意を模索していましたが、2年間の取り組みを経て、ともにまちを支え盛り立てる「ひと」・「事業



報告書：地域共生の土地利用を考える

者」としての信頼関係を築き、両者が一つひとつ納得しながら施設計画をとりまとめることができました。

施設計画そのものも検討会の成果といえますが、もっと重要なことは、「対話を尽くす」というプロセスにあるといえます。住民と事業者とが中立的な立場の第三者の助言を入れながら対話をし、それぞれの思いを確認、ある時は調査・検証し、また、確認を繰り返す。様々な角度から、互いの思いや立場を丁寧に確認し続けることで、新たな価値の共有が図られました。

対話の中から手探りで、お互いが共有できる一致点を探り、それを繰り返すことで、さらなる対話が生まれました。ともに立場の異なる両者が、自らの生活の、自らの事業活動の重要な舞台として、この都心界隈を再認識し、その価値を共有することによって、まちが両者を取り込み、「市井の対話」を可能にしたといえます。

今回の取り組みは、姉小路界隈を考える会の活動により対話の土壌が整備されていた点、分譲事業から賃貸事業への転換が図られた点など、諸条件が揃っていた面はあるものの、対話のプロセスや豊かな対話を可能にした仕組み（関係づくり）には、こうした取り組みを広げていくための多くの一般解が内包されていると考えられます。

(3) まちづくりアドバイザーの役割について

私は姉小路界隈を考える会の設立以来6年間、この界隈で活動支援を行ってきました。検討会では設立段階から、住民と事業者と中立的な第三者の間であって、いろいろな立場を使い分けながら取り組みを支援してきました。土地利用の内容や施設計画の内容をリード、提案したわけではありません。対話の中での

言葉や思いの違いの調整、図面の翻訳者の役割など、検討会を開催するたびにさまざまな調整に走りました。この2年あまりの経験を通じてこのようなパートナーシップ型のまちづくりにおいてまちづくりアドバイザーが非常に重要な役割を担っていると確信しました。

(4) 新たな取り組みの展開に向けて

姉小路界隈を考える会では同時に現代版町式目の具体化に向け、建築協定、地区計画の手法を使つての展開も取り組んでいます。

しかし、一方ではこのような取り組みの成果が見えてきている計画地の柳馬場通をはさんだ西側の敷地において新たなマンション建設による紛争が生じています。地元では地域共生の土地利用検討会の成果を踏まえ、計画についての協議を求めています。事業者や設計者側は「経済活性化」と「建築の自由」の論理を主張するだけで、住民の声に耳を傾けることはないのが現状です。

現在の法律は経済成長の都市政策を支えるためのものであり、維持可能な成熟型の都市づくりの時代を迎えた現在、社会の要請に対応できていません。

姉小路界隈を考える会での活動、地域共生の土地利用検討会の成果、そして現代版町式目の策定などの取り組みの展開を進め、都市の担い手である市民が真に主役となり得る維持可能な都市運営につなげる努力を今後も続けていきたいと考えています。



「まちなか住まい交流会・ワークショップ」

ビジョンを実現する街のパワー

〔取締役会長／三輪 泰司〕

路面電車が、文化をつなぐ

1月に神戸の上川庄二郎先生に、元東京高等裁判所長官をご退官後、沖縄に居を移されたゆたかはじめさん（石田穰一先生）の「沖縄に電車が走る日」を頂戴しました。上川先生も岡山市のLRT導入市民運動を支援されておられるそうです。私は京都商工会議所の世界環境都市推進特別委員長として、電気自動車の実験や、LRT導入検討部会の活動に熱中しています。これは必ず実現します。

5月20日の日曜日、西陣織会館で「がんばれ路面電車シンポジウム」が開かれました。はじめに京都大学の北村隆一先生が現代の都市交通問題から、自動車依存の軽減にむけて、LRTを軸にした都市づくりを世界の事例を紹介してお話されました。次いで「今出川通に路面電車を走らせる実行委員会—今電会—」の皆さんが、現地を歩いて調べた様子をビデオで報告されました。

シンポで西陣の織屋さん、問屋さん、商店街の役員さん等が、思いを語られたように、今出川通には、京大、同志社、立命館と大学があり、百万遍、京都御所、相国寺、白峯神社、北野天満宮それに、冷泉家に花街・上七軒もあります。さらに今出川通は出町柳と白梅町をターミナルとして、比叡山・大原・鞍馬・貴船から、嵯峨野・嵐山まで、洛北から洛西の歴史的な文化と美しい自然を結ぶ京都の東西文化軸です。

1978年9月に全廃されましたが、市電の1番は、東大路通、四条通、千本通そして、今出川通を回る中央環状線のような便利な路線でした。小学生の頃、千本丸太町の近くに住んでいたのでよく1番を利用しました。今出

川って川はどこにあるのやろと探検してみたことがあります。街を歩きまわったり本を調べたりしたのが、思うと「地域」に興味をもった始まりかも知れません。因みに今出川は中川と名を変えたりしていますが、今もあります。徒然草にも今出川が出てきます。

街にひそむパワー

京都市11行政区の計画づくりは、全区それぞれの思いをこめて、立派な基本計画がそろいました。上京区の中心は、何といても西陣です。それが、今、たいへんなことになっています。

西陣はいうまでもなく、着物・帯など和装品の最大・最高の産地ですが、都市の中の都市といえる生産から流通、生活から娯楽までワンセット揃ったディストリクトです。私は、生まれは、中京区の乾学区で、ここは染物の街寄り、織維卸の室町にも近く、小学校は両親の家で上京区の出水校で、ここが西陣の南の端、中学校から大学は、祖父母の家で、やはり上京区の中立学区ですごしました。というわけで友達には織屋も染屋も問屋も揃ってました。本家は染織とは関係のない味噌屋です。学位論文を「都市型工業の地域計画に関する研究」なんてテーマにしたのは、染織、焼物、醸造など伝統産業と、西陣地区に関わる調査・研究の

“今出川通に路面電車を走らせる”運動にご参加・ご協力ください。



「今電会」のマーク

蓄積と土地勘が圧倒的であったからです。私にとって西陣はただ研究のフィールドであるだけでなく、都市は絶対にモノづくりを手放してはならないという信念を叩き込んでくれた街です。

西陣と室町との違いは、モノをつくっていることです。職人がいることです。多くの職種に分業化し、マイスターの域にある技術労働者が住んでいます。室町は流通と企画のセンターで、祇園祭の屏風祭で象徴されるように、開放的で、明るく、見せびらかし型の街です。室町にも周辺には、ネーム付けなど内職の住まいがありますが、比べて西陣は機織との併用住居と、太い格子造りの店が軒を連ね、ワンセットでまとまっていて、街全体が内向きでもあります。イメージの違いは、人間でいえば営業マンと職人の違いでしょうか。しかし、そこには縦横に発達した長い路地、重なる坪庭と土蔵、そして家々に受け継がれているしきたり、まさに京都の街そのものの奥行きがあります。今電会のシンポでレクチャー頂いた北村先生も西陣の住民です。西陣の人々は街への思い入れも奥深いのです。その思いが、どっしりとした構えの家だけでなく、路地の朝顔にも、或いはそれらに負けじと造られた銀行など、近代建築の造形に、厚く深く重いエネルギーが表現されています。それらをマンションに変えたり、モルタル塗りの店にするとしても、街のオーラを引き出すデザインの知恵をこめるべきではないでしょうか。

都市内派流の人文と景観

京都商工会議所・世界環境都市推進特別委員会としましては、京都府・京都市と協力し、

第3回世界水フォーラムの誘致を精力的に進め、2003年3月に、京都をメイン会場に滋賀・大阪と淀川水系を繋いで開催されることに決まりました。名誉総裁は皇太子殿下です。7月9日に、フォーラム事務局の尾田栄章事務局長をお招きして、議員の皆さんに理念・内容・日程など、お話しして頂きました。

6月には、国際ロータリーのサンアントニオ大会へ行ってきました。主目的は、国際青少年交換委員会役員会議です。地区委員長を辞めて10年になるのですが「関係者」ということで登録できるのです。昔の友達は少なくなりましたが、ニューフレンドもできました。もう一つは、サンアントニオのリバーウォークを見ておきたかったのです。ついでに1984年に世界河川博で訪れたニューオリンズへ、博覧会跡地はどうなったろうかと回り道をしてきました。サンアントニオのリバーウォークは、テキサスの平野を湾曲して流れるサンアントニオ川にショートカットを造り、大湾曲部を「派流」にし、ウォーターフロントを今様に蘇らせた仕掛けで、提案した建築家・ロバート・ハグマンの名で知られています。リバーウォークの水は、動いていませんでしたが、匂いがしないのは、何か上手い処理をしているのでしょうか。

1987年、京都府の京都土木事務所の委託で「伏見港歴史的港湾環境整備事業」と「宇治川派流環境整備事業」の2つの調査・計画をしました。これは、港と川です。故・長尾義三先生のご指導を受け、角倉了以と高瀬川の築造史も勉強しました。京都は永い歴史をもつ内陸都市ですから、派流が沢山あります。それぞれ



に人文的なイワレがあります。技術的にもたいへん興味深いものです。

今電会でも「堀川に水を流そう」と意気軒昂たるものでした。伏見では濠川と書いてホリカワと読みます。宇治川派流・琵琶湖疎水を巧みにコントロールしています。伏見はサンアントニオに負けない景観と賑わいを創れると思います。名古屋にも堀川があります。クリーン堀川の会長・小山太郎さんに、森哲郎さんの「堀川マンガ図鑑」を頂きました。こちらは築城の資材を運ぶために、庄内川の水を伊勢湾まで引いたのだそうです。

2003年3月までに、プレコンベンションのひとつに、全国堀川サミットをやってはどうでしょう。

地域デザインとフラクタル

5月に2期4年勤めたJIA(日本建築家協会)副会長と京都経済同友会副代表幹事を退任しましたので、少し楽になりました。7月19日、京都造形芸術大学・2年度目、前期の授業が終わりました。そもそもこの大学の「改組転換」で、地域デザイン・コースを新設した責任上、芸術系大学での「環境デザイン・地域デザイン」教育の組み立てに務めました。1・2回生は専門コースに分けず、一緒の教科を受けるようにしました。今年度、仲助教授の提案で、専門コースへの選択を考えさせるため、2回生向けに「環境デザイン研究Ⅰ」という科目を開講しました。環境デザイン学科18名の全専任教員が、リレー的に1講義ずつ担当します。学生諸君とコーディネーターを勤める学科長の私だけが、全教員の講義を聞くことができ、ハッピーでした。毎回、簡単なレポートを課して意見をいう機会を与え、双方向型を試みま

した。着眼・発想がユニークです。教えられます。住宅の庭づくりをしたいと考えている学生が、庭師の「用と景」なんて、いい言葉から論じてくれました。

かねて、「パブリック・コモン・プライベート」の空間構造を豊かにするコミュニティ・デザインの基礎理論を考えてきました。学部での「地域計画論」と大学院での特論テーマ「平安京の形成と変容」で、『道』が大路・小路から、木の枝のように、町の木戸から、路地へ、カドへと結節点を作りつつ家の中まで自己相似的に発達していく運動を、フラクタル理論で解き明かしてみたりしました。一見カオスのようなイスラーム都市に、オートマトンで作るフラクタル図形の秩序を見ることもできます。

企業経営も一見カオスみたいですが、原理もパワーも潜んでいます。元々、ベンチャーであるアルバックにとって、ベンチャーとはこうだと理論的・実践的に示して、内外の信用を高めるチャンスです。ベンチャーとは、第一に将来ビジョン。第二に綿密な計算。そして経営者は何ヶ月になるか判りませんが、収入も休みも脱却する決意を示すこと。トップの決意があって内外の求心力が働きます。小集団のアソシエイツであるアルバックでは、関係全事務所と計画部それぞれのトップが、ビジョンの実現に熱中します。何年か経って、あれが〈苦難の道〉だったのだなと気がつくのです。今その入り口にあります。

追伸：8月27日、古希を自祝して、還暦のときに作った自家用絵葉書の第2集を作成しました。今回はぐっと絞って「伏見」編にしました。各事務所に置いておきます。

NPO全国フォーラム2001東海会議から
今、英国では Social Entrepreneurs が
ネットワークを創って活躍している

〔名古屋事務所／尾関 利勝〕

夏の暑さ日本一と言われる名古屋の真夏の真っ最中、8月4日(土)、5日(日)の二日間、NPO全国フォーラムが昨年の広島での第一回に引き続き全国から921名の参加者を集めて名古屋国際会議場で開催されました。

「新たな協働の世紀へ」～つくる・つなぐ・つむぐ～をテーマに、基調講演と対談を皮切りに、16のセミナーと10の分科会が二日間に渡って行われ、参加者の熱心な討議が暑く燃え上がっていました。

主催者は(特)日本NPOセンターと開催地名古屋を中心に活動する(特)市民フォーラム21NPOセンター(以下SF21)と、この両者を中心に構成されたNPO全国フォーラム2001東海会議実行委員会です。これに愛知県と名古屋市が共催として参加しています。

私はSF21に立ち上がりから参加し、実態は名前だけになっている理事を受け持っていることから、ささやかながら一つの分科会のお手伝いがてらフォーラムに参加しました。

この全容は秋に報告書が作成される予定になっていますから、後日、これをご参照して頂くとして、私が得たフォーラムからの情報と感想の一部をご紹介します。

私がお手伝いする分科会は二日目でしたので、第一日目は興味のあるテーマとして英国における自治体とNPOとの協働の事例についてのセミナーに参加しました。英国ではサッチャー政権下での強制競争入札によるNPOへの委託を経て、ブレア政権下での政府と市民とが結ぶ協働の盟約=COMPACTとその自治体版=LOCALCOMPACTに至る経過、地方で

の現状等のお話を英国 Reding 郡の担当者お二人から伺いました。大変興味のあるお話でした。短時間のしかも同時通訳の講演ですから、限界もあり踏み込んで理解はできていません。詳しくはSF21の第四次訪英調査団報告に出ています。と言う私もこのレポートを読んでいません。英国民間人のコメンテーターRobinさんによれば、日本よりも10年くらい英国が先に進んでいる様だと言う感想で、多少皮肉も籠めてうまく日本的にアレンジして欲しいと言ったお話でした。この中で主題とははずれるのですが、RobinさんがSocial Entrepreneurs =社会起業家のネットワーク Community Action Network =CANが英国内で500人の参加を得て、英国以外にも広がっていると言う情報が紹介されました。Robinさんによると社会起業家とは「ビジネスの世界で富みを創りだしている起業家と同様に、冒険心や想像力を社会にもたらす人」と言うことを聞いて、ちょっと嬉しくなっていました。

自ら職能のあり方を巡って様々な思いを巡らせている中で、この情報から私達の存在や社会的位置づけがおぼろげに見えてきたように思え、少し元気がわいてきました。今しばらく、まちづくりの現場でビジネスとNPOとそれぞれに係わりながら、協働社会の行く末を確かめていきたいと思います。

— 編集部からのお詫びと訂正 —

前号(108号)の「酒蔵で金管五重奏と地酒を楽しむ」の文中に誤りがありました。下記のとおり訂正するとともにお詫び申し上げます。

(誤) (正)

- ・東工大山田先生→東工大山崎先生
- ・駒井小百合(東京フィル)→駒井小百合(東京)

浪花の町を見に行きませう

—大阪市立住まいのミュージアム—

[大阪事務所／坂井 信行]

とある土曜日の朝、私達は大阪・天神橋筋商店街にいた。休日に大阪に来るのは久しぶりである。天神橋筋商店街といえば高校生が修学旅行で訪れ、かの小淵総理も視察に来たという商店街である。もっとも今日は買い物か目的ではない。商店街の北寄り、天神橋筋六丁目にある「大阪市立住まいのミュージアム」が目当てである。

環状線の天満駅で降りて商店街を北へ歩き出す。お昼までまだ1時間半ある。ミュージアムを30分もかけて見た後、商店街をぶらぶらしながらどこかでお好み焼きでも食べよう。今日は家族も一緒である。

程なく天六駅前にある大阪市立住まい情報センターに到着する。住まいのミュージアムは住まい情報センターの中にある。エレベーターで8階へ。そこで入場料を払って今度は長いエスカレーターで10階へ上がる。10階の大部分は9階から吹き抜けになっている、階下の展示を展望できるようになっている。9階は近世のフロアである。眼下に江戸時代の大阪のまちなみが広がっている。

桂米朝による軽妙な語り口の解説が流れる中、階段で9階へ降りる。テーマパーク的世界に入り込む。

表通りに面して人形屋、本屋、合薬屋、風呂屋、小間物屋などの商家。ちょうどこの日は天神祭のための飾り付けが行われている。路地を入れば裏長屋があって庶民の生活をうかがい知

ることができる。この大坂町三丁目という仮想の街区は、幅4間の東西の通りを挟んだ両側町としてつくられている。1軒ずつ住人の構成やキャラクターまで想定されているそうである。材料や工法など細部に渡りこだわって再現された建物は、エイジング効果によりどこから見ても「本物」である。また、ここでは日の出から日の入りまでの1日を約25分間で体験できるように演出されている。鶏の鳴き声ではじまる夜明けから昼間の物売りの雑踏、灯のほとんどない夜の様子も江戸時代そのままに体験できる。

江戸時代の大阪を十分堪能した後、8階へ降りる。ここは近代のフロアである。文明開化以降、現代までの住まいの移り変わりが模型で展示されている。準備段階の入念な調査に基づいて作られた精巧な模型は見る者を惹きつける迫力がある。

展示物の全てを見終わった時にはもう正午をまわっていた。結局1時間半かけて浪花の町を見てまわったことになる。ミュージアムを出た私達は、少し疲れた脚どりで昼食のお好み焼き屋を探して商店街を今度は南へと歩き出した。



ミュージアム内に再現された浪花のまちなみ（出典：ミュージアム図録）

「学び」から逃走する 子どもたち

佐藤 学



岩波ブックレットNO.524

迫られる—産業社会向け教育からの転換 「学び」から逃走する子どもたち

- 佐藤 学 著
- 岩波ブックレット

社会科学的視点からの的確な分析

大型書店の教育関係の本がずらりと並ぶ前で、1時間以上も私は立ち往生していた。教育がこれだけ社会問題になりながら、適切な本が見つからない。誰も日本の教育問題とまともに取り組んでいないのではないか—そんな暗澹たる気持ちの時に、ようやく1冊の薄い本を見つけた。

多くの他の本と違って、多くの調査結果の数字を使い具体的に述べ、教育界だけでなく社会全体の変化と対比して述べるという科学的かつ総合的視野で書かれている。

イメージ先行の「子どもの危機」

マスコミが報道する「いじめ」「不登校」「学級崩壊」「少年犯罪」などは、いずれも子どもの一部の現象で、これを主要な問題ととらえるのは適切でない。

また、小学生の93%、中学生の92%が「学

紹介者/大阪事務所 重本 幸彦

校は楽しい」としている（1998年、総務庁調査）。

この本は、こうした事実から始まる。

危機の中心は「勉強」からの逃避

著者は、今の子どもを巡る危機の中心は「勉強」からの逃避傾向で、70～80%の子どもにみられると言う。

「日本の子どもは勉強に追われてゆとりがない」と人々は信じているが、これは過去の話で今の実態とは言えず、猛烈な塾通いに追われる子どもは一部だと言う。

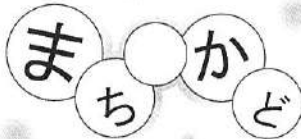
日本が近代化の道を駆けて、富国強兵から高度な産業社会へ向かう中、国民全体の学力向上を目指した学校教育システムは概ね効果的だった。しかし、今や高進学率を達成し産業社会自体が変貌する中、画一的な今までの教育システムは社会的役割を失っている。今の学校は、「学力により子どもを振り分ける装置」に転化した。学力競争に勝てなかった子どもが、ニヒリズムに陥りやすい。また、子どもの平均的学力の低下が著しい。これが、著者の分析だ。

「勉強」から「学び」への発展

今後の展望について、著者は旧態依然たる「勉強」から自発的な「学び」への転換を基本に、(1)実体験に基づく“活動的な学び”、(2)対話による“協同的な学び”、(3)知識を貯め込む貯金の勉強ではなく知識を活用する“創造的な学び”を提唱する。

小冊子ながら、日本の教育問題の核心に迫る貴重な1冊ではないかと思う。

(注) 書名は、「学び」から逃走…ですが、著者も本文で「勉強」から逃走…が正確としています。



空飛ぶ広告？地を這う広告！

〔大阪事務所／中村 孝子〕

車体全面にカラフルなデザイン画や広告を載せた乗り物を見かけることは珍しくなくなった。バスや電車だけでないYahooやJ-phonなんて広告をくっつけた飛行機にまで至る。最近、気になったものをいくつか紹介すると…。

先日、USJに行ったときに乗った電車。ぱっくり大きな口を開けた恐竜やにんまり笑う？ターミネーターなど車体いっぱいに描かれていた。目的地に到着する前から気分を盛り上げるその効果は絶大である。

そして、もう一つ私の住む京都市に登場した広告バスである。車体に広告入りの印刷フィルムを貼ったバスで、来年2月まで試験運行中である。すでに東京ではバス事業の赤字を解消するために路線バスなど大型車両に対する広告の規制を緩和しているが、京都市でも今春から市内を走っている。導入台数はまだ少ないのでなかなかお目にかかれないが、新聞社の広告などなかなかユニークだ。目の前にバスが停まってもそれが市バスであると認識するのに時間がかかるけれど、慣れれば大丈夫である。広

告費は年間150万円ということであるが、まち中走る広告として宣伝効果は高い。広告主とバス事業者（京都市交通局）の両者にメリットがある。

さて、広告に関する条例といえば、京都市の一部地域では景観を尊重するため看板などに使う明るい色に規制が設けられている*。バスの広告はどうなのだろう。バスもまちの景観を構成する重要な要素だと思うのだが…。

市の交通局ではデザインの審査が行われているようだ。これからどんなバスがまちを演出してくれるのか楽しみである。

※一部地域では、マクドナルドの赤やJOMO(ガソリンスタンド)の緑など看板の色を変えている。



JR桜島線を走る大迫力の電車



出典：京都市交通局HP

<http://www.city.kyoto.jp/kotsu/news/2001/2001022.htm>

アルパック (株)地域計画建築研究所

本社 URL:<http://www.arpak.co.jp> E-mail:info@arpak.co.jp
京都事務所 〒600-8007京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
大阪事務所 〒540-0001大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478
名古屋事務所 〒460-0008名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F/TEL(052)265-2401 FAX(052)249-3925
東京事務所 〒186-0001東京都国立市北1-1-17・田畑ビル3F/TEL(042)501-2531 FAX(042)501-3024 分室/TEL(03)3226-9130
九州事務所 (株)よかネット 〒810-0001福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハビエ5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673